

この、周囲を山で囲まれた三日月盆地みかづきぼんちの平原でも、激しい戦いがくり返されていた。平原には草も生えず、土がむきだしになっていた。

数百、数千の騎馬兵が、砂ぼこりをたてて通り過ぎると、たくさん屍が折り重なっていた。里から来た者たちは、その屍の山から、はぎ取れる物ははぎ取って、屍は大きな穴に埋めた。

戦闘がおさまり、雪が降り、雪が積り、根雪がとけ、草や木々が芽吹きはじめたころ、ひとりの男がこの平原にやってくる。

杖をつき、編み笠を被り、墨染めの衣を身につけていた。手には数珠をかけ、なにやら念仏を唱えながら、わずかに草がよみがえってきた平原を歩きまわった。

そして、ふいと立ち止まると、
「うおっ」

という、声にならない声を発し、がくりとひざをついた。

男は、足元に小さな黒い石を見つけたのだ。手にとった石は丸く磨かれた黒曜石の珠で、小さな穴には絹糸を編んだひもが通されていた。ひもは引きちぎられ、裂け目は焼け焦げていた。

男はそれから三日三晩、念仏を唱えながらその場を動くとはしなかった。

四日目の朝、男は平原から姿を消した。

しばらくすると、どこから手にいれたのか、大きな荷物を背負い、着古された藍染めの筒袖を着て、戻ってきた。

そして小川に近いところに、林から切り出した丸太で小屋を建て始めた。小屋ができるまで、わずかばかりの土地を耕して畑を作った。その間も、黒曜石の珠を見つけた場所、朝に夕に念仏を唱えていた。珠は、長いひもが通され、男の首にかけられていた。

またしばらくすると、どこから運んできたのか、ひと抱えの石を置いて、三日三晩念仏を唱え、四日目の夜明けに川で水浴びをしてから、石を彫り始めた。

それが、鬼の子の石像であった。

かつて、男は三日月盆地のある国の、寺町に住む仏具師だった。寺で使う燭台や香炉に、細かい飾り彫りをするのが仕事だった。

男は、いつ、どこで生まれたのか、知らないまま尼寺で育った。まだおぼつかない足取りで、麦穂峠むぎほとうげから続く道を、ひとり歩いているところを里の者に見つけられ、尼寺にあずけられたのだ。尼寺では、いくさで親を失くした子どもたちが育てられていた。

「村が焼打ちにでもあって、逃げる途中で親とはぐれてしまったでしょう。それにしても、ひとりでもよく生きのびてくれました」